

令和5年度 学生による地域フィールドワーク研究助成事業
研究 成 果 報 告 書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学人文社会芸術総合研究科
- ・所属ゼミ 藪谷研究室
- ・指導教員 藪谷祐介
- ・代表学生 北島陽貴
- ・参加学生 重山隼人、梶田美結

【研究題目】コミュニティビルドを用いた空き家活用の実践とプラットフォームの構築:高岡市吉久を対象として

1. 課題解決策の要約

高岡市吉久では人口減少や少子高齢化などを背景にした空き家の増加や地域コミュニティの衰退という地域課題を有している。その改善策として、住まい手を中心に仲間とともに家づくりを行うコミュニティビルド¹⁾(以下、CB)という方法に着目した。そのCBを用いて、令和4年度から取り組んできた大学生シェアハウスとして活用している地域内の町家を舞台としたセルフリノベーション(以下、SR)を地域に開いた活動とすることで、参加者のまちづくり意識の向上や空き家活用のコミュニティ形成を目指す。

2. 調査研究の目的

本研究では、参加者を対象としたアンケート・ヒアリング調査を用いてSRを地域に開くCBの効果を検証することを目的とする。空き家活用の拠点形成とコミュニティ形成に取り組み、空き家活用のプラットフォーム構築の足掛かりとすることを目指す。

3. 調査研究の内容

本研究では、大学生シェアハウスを舞台として子どもから大人までの地域住民や大学生を対象とした3回のSRのワークショップ(以下、WS)と、昨年度から積み重ねてきたSRを公開する内覧会による複数回のCBを通して、CB参加者のまちづくり意識の向上や空き家活用のコミュニティ形成を目指してきた。また、その効果検証として、CBごとに参加者を対象としたアンケート調査を実施し、最終的には主要な参加者4名を対象としたヒアリング調査を実施することによって、空き家活用の促進におけるCBの効果検証を行った。なお、本研究におけるCBは実施期間が短いことや参加しやすい手軽なCBとしていることから、空き家活用への大きな効果に留まらず、CBの舞台となる大学生シェアハウスの活動の認知拡大や、参加者の小さな意識変化も効果の一部として捉えることとする。また、CBの実施にあたって大学生シェアハウスの入居者以外の人が集まって作業できる作業場をつくるために、7月に畳を取り外し土足で出入りできる部屋を用意し、作業場の窓を開けられるように網戸を制作した。網戸は昨年度のSRで経験していたが、やや難易度が高いため大学生シェアハウスの入居者だけで制作した。

4. 調査研究の成果



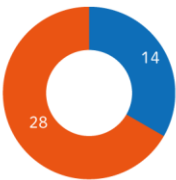





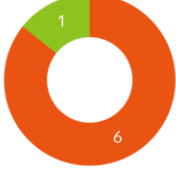
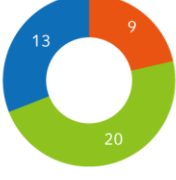
4-1. CB の実施内容とアンケート調査

CB への参加実態と効果検証を行うために、各 CB の参加者を対象としたアンケート調査を行った。実施した CB の実施概要と参加者の属性を表1に、CB への参加実態を表2に示す。また、CB の様子は図1～4に示す。なお、グラフは回答者の割合を示し、数値は回答者数を示している。

(1)CBの効果

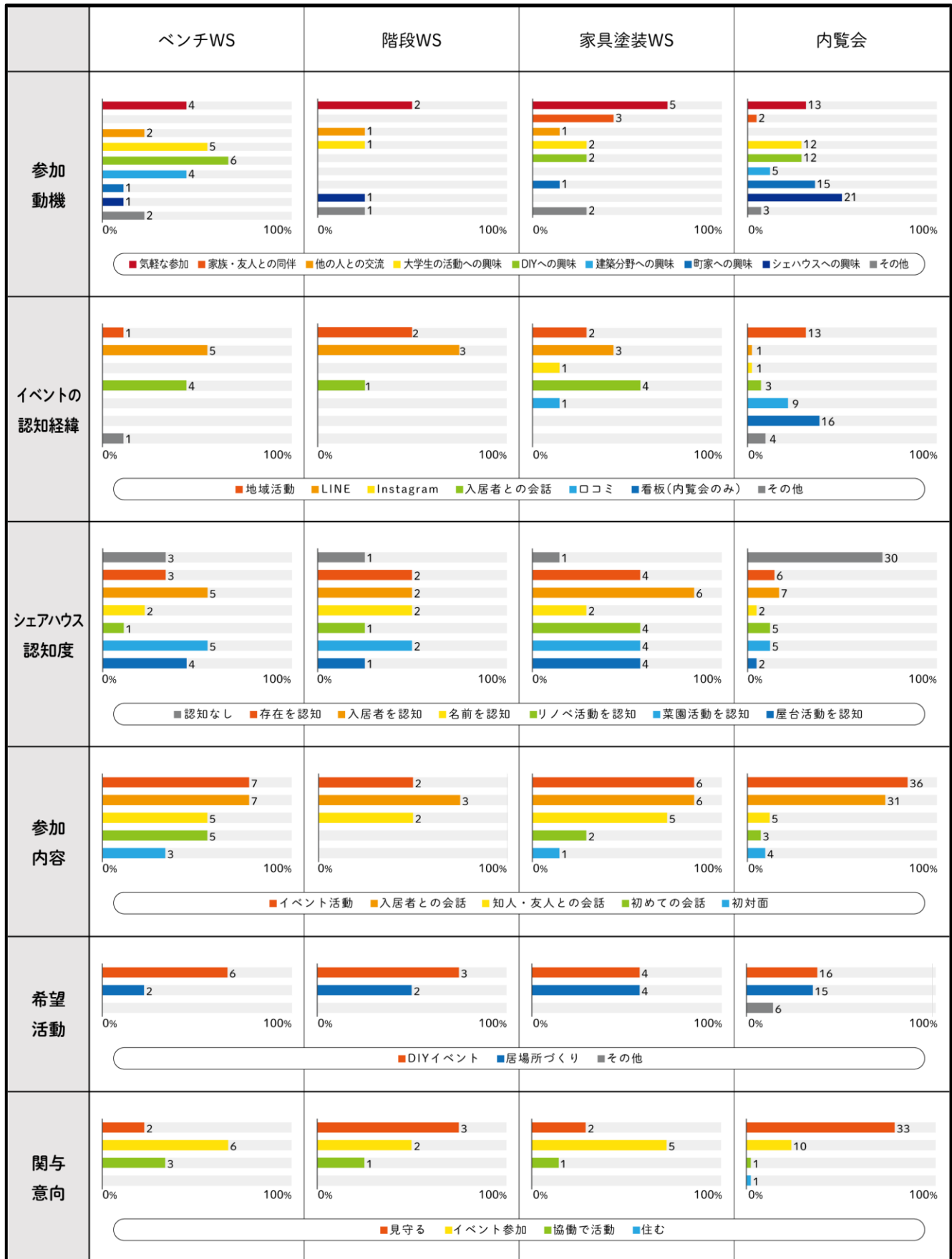
表1の【参加者数】や表2の【参加動機】から、実践的で時間がかかるWSでは、少人数の参加者で、大学生・建築・DIYに興味を持つ参加者の割合が高いことが分かる。図1～3のようにWSの中で一緒に作業する中で様々な会話が生まれ、参加者の人となりを知ることができたことから関係性の進展も実感した。表2の【参加内容】から、参加者同士の交流も生まれていることが分かり、WS形式のCBでは緩やかなコミュニティが形成され、創発性の向上が期待できると推察される。その

表1 | CBの実施概要と参加者の属性

日程	2023年8月19日(土)	2023年8月20日(日)	2023年9月24日(日)	2023年10月21(土)・22日(日)
活動名	ベンチWS	階段WS	家具塗装WS	内覧会 (地域イベントに合わせて開催)
参加者数	10人	4人	10人 (アンケート回答者:7人)	100人程度 (アンケート回答者:42人)
性別				
年齢				
職業				
居住地				

一方で、表1の【参加者数】【年齢】や表2の【参加動機】から、それほど時間がかからず作業を伴わない内覧会では、高齢者でも参加しやすく、シェアハウスや町家自体に興味を持つ参加者の割合が高いことが分かる。表2の【シェアハウス認知度】から、大学生シェアハウスやその活動を認知していなかった参加者が多いことから、認知拡大の機会となっていることが分かる。また、表2の【関

表2 CBへの参加実態



【与意向】から、WS では今後の入居者との協働による関与を希望する参加者の割合が比較的高く、内覧会では住んでみたいと回答する参加者が唯一存在することが分かる。これらのことから、WS 形式の CB では作業を通して、じっくり会話しながら交流する中で、CB による緩やかなコミュニティが形成され、今後の参加者との協働や参加者の実践意欲の向上が期待できると考えられる。その一方で、内覧会形式の CB ではコミュニティ形成には繋がりにくい一方で、参加がしやすく多くの人が訪れることができることから認知拡大の効果は大きく、実際に内部空間を体験することで住むイメージがしやすくなる効果もあると考えられる。

(2) CB の展開

表2の【シェアハウスの認知度】から、WS では大学生シェアハウスを認知している参加者の割合が高いが、SR の認知度は低い。今回の CB を通して参加者の認知が深まっていると推察される。また、表2の【関与意向】としてはイベント参加を希望する参加者が多く、今後 DIY イベントの希望者が多いことから、今後も CB の活動を継続していきたいと考えている。資金源の問題は地域住民をクライアントとした出張 WS や地域内クラウドファンディングなども視野に入れて検討していきたいと考えている。なお、上記のように複数回の CB を通して、少ないながらも協働での活動を希望する参加者や住んでみたいと回答した参加者と知り合うことができた。今後、そのような参加者も巻き込みながら、活動を展開させることで、CB の継続的な実践と関係者のまちづくり意識の向上が期待できると考えている。

表2の【参加動機】から、WS の中でも塗装は気軽に参加でき、子供連れの参加者もいた(図3)ことから、WS の中では難易度が低く参加しやすいテーマであると推察される。また、表1の【職業】から、ベンチ WS では学生の参加者が多いことから、ベンチのようなアイコン的なテーマの WS は、学生から関心を持ってもらえる可能性が推察される。その一方で、表1の【参加者数】【性別】から、参加者が少なく女性の参加者のいない階段 WS は、難易度が高い印象を持たれていた可能性がある。これらのことから、SR のハードルを下げるためには実際に工具を使って体験してもらうことが重要であると考えられる。そのためには、難易度が低いテーマを中心にしつつ、難易度を下げる加工方法や告知の工夫によって、いかに気軽に参加できるようにするかがポイントであると考えられる。

表2の【イベントの認知経緯】から、CB のイベントは口コミや居住者の会話、地域内や大学内の LINE グループで認知されており、内覧会では主要道路に立て看板を設置して誘導したことで参加者が増えていることが分かる。地域内に住みながら様々な活動を行っている大学生であることで、LINE や会話によって活動の認知を広げることができていると推察される。活動を展開させるためには、地域内での様々な活動を通して地縁を育むことや学内での繋がりが重要であると考えられる。なお、告知はまだ不十分であるため、チラシの配布やポスターの掲示などの余地はまだあり、今後の課題としたい。

4-2. 主要な参加者へのヒアリング調査

複数回の CB による参加者への影響を捉えるために、複数回参加している主要な参加者 4 名（地域住民 2 名・大学生 2 名）を対象としたヒアリング調査を行った。

(1) 空き家活用への意識変化

地域住民からは、WS 形式での CB での経験から地域住民の SR の主体性の向上や、空き家活用への関心の向上が確認できた。大学生からは、協働による空き家活用のハードルの低下や空き家の活用意欲の向上が確認できた。また、自宅の SR 意識の向上も確認できた。

(2) まちづくり活動・地域活動への参加状況や参加意識の変化

地域住民からは、もともと参加状況や参加意欲が高い地域住民もいる一方で、CB をはじめとした大学生シェアハウスの活動を通じた地域活動への参加機会の向上が確認できた。大学生からは



図 1 | ベンチ WS の様子



図 2 | 階段 WS の様子



図 3 | 家具塗装 WS の様子



図 4 | 内覧会の様子

地域に入り込んだ活動機会の向上が確認できた。

(3) 大学生シェアハウスの情報拡散

地域住民からは、会話の話題家族や仕事の関係者との会話の話題に挙がっていることが確認できた。大学生からは、SNSでの情報共有や知人・友人との会話の話題に挙がっており、他にも関心を持っている学生がいることが確認できた。

(4) CB での交流による人付き合いの変化

地域住民からは、家族や地域内、他の大学生との共通の話題になっていることや参加者同士の付き合い方が深まっていることが確認できた。大学生からは、地域住民の知人が増えたことや会話のしやすさが向上していることが確認できた。

(5) 大学生が町家に住むハードルの変化

地域住民からは家賃を安くすることや駐車場や倉庫の提供などを支援することの必要性が挙げられた。また、大学生シェアハウスは来年度で3年目を迎えるが、当初は警戒する地域住民もおり、地域に開いた活動を行うことで入居者の人となりを知ってもらう機会になっていることが分かった。大学生からは、冷暖房設備の整備・プライバシーの確保・家賃補助などの必要性が挙げられた。また、居住体験をしてみないと分からないという意見も挙げられた。

5. 調査研究に基づく提言

本研究を通して、CB によって空き家活用における間接的な効果を明らかにした。調査から得られた知見を以下にまとめる。

- ① CB は活動形式によって効果が異なる。WS 形式では、少人数の参加者と一緒に作業する中でじっくり交流することができ、CB をきっかけとした緩やかなコミュニティ形成や空き家活用・SR の意欲向上・ハードルの低下の効果が生まれる。内覧会形式では、多くの人が参加でき、活動の認知拡大や居住イメージの解像度向上の効果が生まれる。
- ② CB を行うことで、一部の参加者との協働による活動の継続・展開の可能性が生まれる。
- ③ WS 形式の CB において参加のハードルを下げるためには、家具塗装をはじめとした子供でも気軽に参加できるテーマの設定が重要であり、加工方法や告知の工夫が必要である。
- ④ 地域内で活動を展開することで地縁が深まり、活動の認知拡大に繋がるだけでなく、地域住民の地域活動への参加機会の創出にも繋がる。

6. 課題解決策の自己評価

本研究では4回の CB 活動を実践し、網戸や階段によって作業場環境を整備し活動拠点としての機能を追加したことに加えて、空き家活用に関心を持つ地域住民や学生との交流機会が生まれ、空き家活用のプラットフォーム構築への足掛かりをつかむことができた。今年度の実践を通して、CB の空き家活用・SR のハードル低下や CB によるコミュニティ形成への効果や意義とともに、CB を継続的に実施するための企画・告知・準備の難しさを実感した。その難しさから、当初の計画から実践内容を変更した点もあり、特に告知方法は不十分であったため今後の課題としたい。さらに、今年度の実践を通して生まれた参加者との繋がりを活かして今後さらに連携し、具体的なアクションを実行することで空き家活用のプラットフォーム構築に繋がると考える。

参考文献

- 1) 河野直+河野桃子+つみき設計施工社(2018)「ともにつくる DIY ワークショップ リノベーション空間と8つのメソッド」ユウブックス